

2014年12月28日 年末感謝礼拝

説教「恵みの神さま」

詩篇 118 篇 1-6 節

【主に感謝せよ】

ユダヤの新年祭で歌われる詩篇 118 篇ですが、気をつけるべき点があります。それは「主に感謝せよ」(1)と歌うことです。「主の恵みに感謝せよ」ではなく、「主に感謝せよ」なのです。聖書が教えるのは、神さまに感謝することです。受けた祝福をただありがたがるのではなく、その祝福の与え主である神さまに感謝することです。これはたいせつなことです。もし、私たちが神さまのくださる祝福だけを見るなら、その祝福に目を奪われてしまいます。そしてその祝福を手放せなくなってしまうのです。祝福が神さまよりも大事になってしまいます。

神さまは時には祝福を取り上げることをなさいます。それは、もっとよいものを与えるためです。「さあ、いま、あなたが持っているものを、私は取り上げよう。それよりもっとよいものをあげたいからだ」とそうおっしゃることがあるのです。ですから神さまを見て、神さまに信頼することです。たとえ、いまの祝福を手放さなければならぬとしても神さまに信頼するのです。ここにさらなる祝福の秘訣があります。

【主の恵みはとこしえまで】

聖書がものごとをとらえらる方には特徴があります。ボートを漕ぐことに似ているのです。ボ

ートを漕ぐ人は進行方向を見ていません。逆に進行方向に背を向けて、自分が来た方向を見ます。自分が出発したところ、自分が漕いできた航跡を見るのです。そうすることによって、自分を支えてくださっているお方の手の中に自分がいるということをいつも確認するのです。

世の中一般では、未来は不安に満ちたものかもしれません。だから自分の手で切り開かなければならないと考えます。けれども、信仰者にとってはそうではありません。信仰者にとって未来は、過去の航跡の延長線上にあります。変わることがない神さまの手の中にあるのです。だから、不安に思う必要がないのです。

1-4節まで繰り返される「主の恵みはとこしえまで」の「恵み」という言葉には、「誠実」という意味があります。「主の恵み」は主の誠実です。主は誠実なお方。主の誠実さは、過去から現在を貫いて永遠に変わることがありません。神さまのあわれみは、決してかわらないのです。たとえどんなことがあっても、神さまの愛だけは変わることがありません。神さまのご誠実はどんな大きな悲しみの中でも変わることがないのです。そして神さまの愛は、悲しみを喜びの苗床としてくださるのです。

【神さまは私の味方】

6節の「主は私の味方」は、なんとすばらしい確信です。神さまは味方！ 思えば、まだ神さまを知らなかったころから、神さまは私たちの味方で

した。私たちが、神さまを受け入れないでいるときから、私たちの味方。だから、私たちに御子を与え、私たちを招き続けてくださったのです。

神さまを知った私たちにとっては、神さまはもちろん味方。私たちが罪に陥るときでさえも、味方なのです。味方だからこそ、私たちの罪を明らかにし、悔い改めに導かれます。そして、何度でも何度でも神さまと共に歩く歩みをもう一度はじめさせてくださいます。

5節の「私を広い所に置かれた」はこの信仰の告白のクライマックスのようなところ。牢屋にいれていた人が、そこから解放放たれて広いところに出て行くようすを思わせます。苦しみの中から呼び求める者を、神さまは見ないふりができません。神さまは私たちの味方だからです。

クリスチャンも他の人々と同じ苦しみをたどりまします。けれども、私たちはそのような苦しみの中に、とじこめられていません。私たちの生は、広いところに置かれた生。私たちの老いは、仲間と共に老いていく老い。病もまた死も神さまの恵みの中にあります。神さまが味方してくださっているのです。

だから私たちの死さえも、閉じ込められてはいません。私たちは死の中に閉じ込められていないのです。死もまた広いところで起こっているのです。神さまが味方だからです。死ぬ前も、死ぬときも、死んでいる間も、神さまは味方です。そして、復活の朝には、なおさらなのです。